

鐵道唱歌余話

「汽笛一声新橋を・・・」の源流は今から700年前にあった！」

佐藤 三祿

“汽笛一声新橋を・・・”の源流は今から700年前、13世紀ころにあったと言ったら、誰しも何をバカなことをと思われるだろうが、筆者は最近謡曲に関する知見からこの説を考え付いた。その経緯をここに記して諸兄の暇つぶしの糧にして頂くことにする。

鐵道唱歌の歌詞の原版を探している時、大分県出身大悟法利雄（だいがぼう としお）氏になる一冊の研究書「なつかしの鐵道唱歌」（昭和44年講談社）に出合った。「地理教育 鐵道唱歌」第1集いわゆる鐵道唱歌“汽笛一声新橋を・・・”は明治33年（1900年）に発表されるや爆発的に大流行し、作詩者大和田建樹（けんき）は一躍唱歌作者の権威として世間に認められるようになった。その後昭和の時代になって、関心ある者の間で鐵道唱歌誕生の経緯の解明が一つの研究課題となり、前述の大悟法利雄氏の執拗な調査の結果、大和田建樹の活動と併せて、鐵道唱歌誕生時代の類似曲の存在、関係する作詩家、作曲家、出版元、そして出版の経緯などが解明された。詳しくは同書を参照されたい。筆者はこの本の中に、本文の表題とした「汽笛一声新橋を・・・」の源流は今から700年前にあった！」ことに関係した一つの発見をしたがその事は後に述べる。

話しは変わるが、日本の古典芸能である能楽はその中で謡曲が謡われる。謡曲は能という楽劇の物語（語り）と歌（謡）と会話（問答）を書き記した言わば台本であり、その文章は詞章と呼ばれる韻文である。謡曲の詞章には幾つかの段落があり、その一つに「道行（みちゆき）」という段落がある。道行は物語の場面（場所）の移動を表現する所に用いられ、例えば場所が京都から難波に移動する道々の様子を詞章で表現する。舞台装置をほとんど用いない能の表現方法の工夫である。謡曲の道行でその行程といい詞章の長さといい、一番長いものに能「盛久（もりひさ）」の道行が挙げられる。平家の武士、主馬の判官盛久は源平の戦に敗れ囚われの身となり、頼朝の裁きを受けるために京都から鎌倉まで護送されことになる。盛久は日頃信心している清水観世音に暇詣をした後、懐かしの京都を後にして鎌倉までの移動が道行の詞章となっている。

『(地謡)「世上に隠れなき身とて、思わざる外の旅行（たびゆき）の道、関の東に赴けば跡白河を行く浪の、いつ帰るべき、旅ならん。ここは誰をか松坂や四宮河原 四つ乃辻。これやこの行くも帰るも別れては、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも、逢坂（あふさか）の関守も今の我をばよもとめじ。勢田（せた）乃長橋打ち渡り、立ちよる影は鏡山、さのみ年経ぬ身なれども。衰えは老蘇（おいそ）の森を過ぐるや美濃尾張、熱田乃浦の夕汐の道をば波にかくされて、廻れば野邊に鳴海瀧（なるみがた）又八つ橋や高師山 又八つ橋や高師山。汐見坂橋本の濱名の橋を打ち渡り。」（シテ）「旅衣かく来て見んと思いきや、命なりけり小夜の中山はこれかとよ」（地謡）「かはる湊瀬の大井川、過ぎ行く波も宇津の山」（シテ）「超えても関に清見瀧（きよみがた）」（地謡）「三保の入海 田子の浦打ち出でて見ればましろなる、富士乃嶺箱根山、猶明け行くや星月夜はや鎌倉に着きにけり はや鎌倉に着きにけり』」（宝生流謡本より。赤字は土地の名前に係わる言葉）

各地の地名を織り込んで、掛けことば、歌枕を巧妙に使い旅路の情景と盛久の心情を表す韻文の傑作である。この道行の一節を謡って能舞台は都京都から一変して鎌倉由比ガ浜の処刑場に移るのである。鉄道唱歌の表現はこの詞章の表現とどこか似ている。能楽関係者の中には鉄道唱歌を謡曲「盛久」の道行のコピー版であると言う人は多い。

さて本題の鉄道唱歌の源流に戻る。

独立行政法人国立文化財機構（東京国立博物館などが所属）の東京文化財研究所無形文化遺産部無形文化財研究室長高桑いづみ博士（文学）は、古文書の解読分析による能楽の成立過程解明の研究分野で著名である。高桑博士等の近年の研究によると、室町時代に世阿弥らが完成させた能楽の謡曲には、その時期よりももう一時代前、13世紀後半から14世紀初頭にかけて作り出され、以後200年間室町時代末まで武士の間で大いに持て囃され、その後消滅した「宴曲（えんぎょく）」あるいは「海道（かいどう）」と呼ぶ当時の流行歌の影響が大きく残っているという（「流行歌としての道行・・・海道下りを中心とした狂言歌謡の源流と広がり・・・」2014年10月第9回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座資料）。その宴曲・海道の特徴は（1）韻文であること、（2）地名が読み込まれていること、（3）進行性があることと言われており、「盛久」の道行は正にその影響の表れである。足利将軍の不興を買い追放された能作者が、宴曲を織り込んだ謡曲を編み出し、将軍の勘気が融けて許された話が残っているという。宴曲・海道の文書は現存しており、その一つ「海道下り」は、京の都から鎌倉鶴ヶ丘八幡宮まで5～6キロ毎に90もの地名を織り込み、当時の東海道に即して書かれているという。またその曲譜から当時の音程・リズムなどの解明も高桑博士等により試みられ、それが現在の謡曲の音程に残っていることが示されている。

鉄道唱歌の作詞者大和田建樹は、古い時代に宴曲・海道が大いに持て囃されていたことを知っていたであろうか？ その点に関して頭記の大悟法利雄著「なつかしの鉄道唱歌」の中に重要な発見がある。大和田建樹は元々東京帝国大学で国文学の教鞭を取り、その後東京高等師範学校の教授を勤めた当時一流の国文学者である。そして特に謡曲の研究に詳しく、「謡曲通解」および「謡曲評釈」の画期的な評釈研究著作がある。この点が鉄道唱歌創作において重要な点であると思われる。大和田建樹は安政四年（1857年）の生まれであり、活躍した明治の時代はまだ江戸時代の文化がそのまま流れている時代である。さらに言えば江戸時代300年の泰平は、それ以前の文化をそっくり抱え込んで過ぎて行った時代で、400年前くらいの事はついこの間の様な話しであつたらうと想像される。しかも謡曲の研究者である大和田建樹が宴曲・海道大流行の話を知らない筈はない。むしろ大和田建樹は日本人が宴曲・海道に対して持っていた感覚は、300年やそこらではそう変わるものではなく、明治の当時でも大衆に受け入れられることを確信して鉄道唱歌作詞に取り組んだに違いない。謡曲研究の国文学者であればこそその目論見であり、果たせるかな鉄道唱歌は爆発的な流行を生み、さらに山陽、九州の鉄道唱歌はじめ全国の鉄道に、さらには朝鮮満州の鉄道に広がって行く。

鉄道唱歌がただ蒸気汽車が走り出した興奮や物珍しさだけから流行ったのではなく、古来日本人の血に流れている、この日本の土地の空間、時間を巡り楽しむ宴曲・海道感覚を再び呼び起こし共鳴させたところに大衆に受け入れられた原因があると見るべきである。すなわち「鉄道唱歌の源流は今から700年前にあった！」という事になる。

旧新橋停車場での鉄道唱歌の合唱に触発されて始めた歌詞探しから、思い掛けなく謡曲の世界に繋がってしまった。ちなみに能「盛久」の結末は、曙の鎌倉由比ガ浜でいざ首切り処刑というその時、一団の光明が飛来し首切り役の刀が段々に折れてしまう。同時に頼朝が観音の霊夢を蒙って盛久を赦免し、酒宴を催して盛久が勇壮な男舞を舞い目出度く都に帰るのである。興味をお持ちでしたら一度能楽堂に足を運んで、能をご覧になることをお勧めする。

独りよがりの頭の体操にお付き合いいただき有難うございました。

2015年6月20日

「地理教育鉄道唱歌 第壱集」(新橋～神戸)の歌詞全文は下記ホームページでご覧になれます。

<http://homepage1.nifty.com/gyouseinet/tetsudou/toukaidou.htm>